



「FUGURO」をめぐるストーリー

てしごとプロジェクト WATALIS 代表 引地 恵

子どものころからごく最近まで、私にとっての世界とはこの小さな『亘理町』がすべてでした。温暖で豊かな自然に恵まれたこの町に生まれ育ち、遠くの世界に憧れを感じながらも、この地から離れられずにいました。亘理町立郷土資料館の職員という仕事柄、町の文化や風俗習慣に触れる機会も多く、ふるさとへの思いは人一倍強まってきたように思います。2011年2月にはテーマ展「着物～思いを纏う」開催に向けた事前調査で、着物に込められた人々の思いを知ることができました。

そしてその翌月3月11日、町は突然大きな地震と信じがたいような津波に襲われ、亘理の人たちが大切に守ってきたものの多くがあっという間になくなりました。古く郷土に伝わる品々も、込められた思いや記憶もろとも失われてしまったのです。

ところが震災がきっかけとなって、手が届くとは思えなかった遠く別の世界から、意外なほどあっさりと、支援という名のたくさんのヒト・モノ・コトがこの町にやってきて、今までにない多くの出会いがありました。震災直後から町の職員として従事してきた物資配布の作業が一段落してからは、被災したお宅を訪ねて過去の風習などを聞き、残された民俗資料を集めていました。そんななか、9月にとある旧家のお宅で昔ながらのゆかしい習わし「ふぐろ」の話を伺い、貴重な現物を譲り受けたのです。10月には震災で全壊した建物を解体する呉服店に資料調査に行きました。そこで目にしたのは、床や棚に散乱する埃を被った着物地たち。聞けばこのまま処分するというのです。着物を着るとき、人はそこに込められた思いをも纏うもの。労働に明け暮れる日々の中で、誇らしくもあり、晴れがましい気持ちになれる特別のひとつとき。「母が織り、縫ってくれた着物」「嫁入りの時に自分で縫って持参した着物」「家族の衣類を仕立てるために和裁や洋裁の学校に通ったものよ」などなど――震災前に町の高齢の女性たちから聞き集めた話が脳裏によみがえり、とても見過ごすわけにはいかず、使うあてもないままに生地を譲り受けることを決めました。生地はいくつものごみ袋に詰め込んで持ち帰りました。

震災の辛さを感じまいと自らの心を麻痺させていた日々が過ぎ、少しずつ気持ちがゆるみ始めた頃、思いを形にするはずだった生地たちを手にとることができました。と同時に、支援してくださる方々への「感謝」の気持ちがごく自然に湧き出てきました。その思いは、感謝の気持ちを忘れずに形にし、贈ることを通して相手に伝えるという亘理の人たちのあたたかさを象徴する「ふぐろ」のエピソードと重なるものでした。

この町で守るべきよきものを受け継ぎながら、再び立ち上がるためにあらたなものを創造していきたいという私の思い。声をかけ、導き、諦めずに見守り、支援してくれる多くの人たち。ともに行動する大切な仲間たち。皆の気持ちがひとつになって生み出された「FUGURO」。

亘理にはこれからあらたに「FUGURO」の作り手となる人材がたくさんいます。かつて家族のために着物や作業着を縫った高齢の女性たち、地元の学校で和裁を学んだ知的障がいを持つ女性たち、外に働きに出られずにいる小さな子どもを抱えた若い母親たち。そして震災で被災し、わずかながらも生活を支えたいと願う人たち。何よりも地域の人とのつながりを求める人たち。

「FUGURO」を縫う場は、誰もが訪れることができる開かれた空間でありたい。よきモノ・コト・ヒトが集まり、新たなものが生み出され、発信できる場。そこにくることで楽しくワクワクしてくる場。そんな場を作るために、仲間とともにこれからの人生を賭けてみようと思います。生まれ育ったこの地で、皆と手を携えてよりよき未来を願う。これは私にとって生まれてはじめての“創ること”へのチャレンジです。